

そうということが10歳の女の子、11歳の男の子は分かってしまう時期だと言えます。

現代の子ども

10歳、11歳という微妙な年齢の頃、1年半ぐらいの間に、誰もが人間の真実に触れてしまうのです。そのような期間があるのです。皆さん方もすべて通ってこられました。その時期にある子どもたちをもっと注視して、大人達がどう応えるかを考えていくことが大切なのです。

現代の子どもたちは、一見して非常にゆがんでいたり、非常に頭だけが良かったり、たくさんの情報だけをもっていたりというように見えます。ほんの子どもである部分と、人間が最終的に到達する部分とを両方混在しながらもっているのです。

現代は、それらを本当の意味で生かしていくことのできない世の中になってしまっています。その中で彼らのもっているものを生かしていけるのは何なのかと問うと、やはり私は「教育」だと考えています。

「教育」は広い意味で親が子どもに施している家庭教育、養育ですが、そういった可能性をもった子どもたちをどうやって育てていくことができるのかと問われていると私は考えているわけです。

ですから、10歳、11歳という前思春期の第1章をどういう形でこの世の中に問うかは、「ハリーポッター」シリーズや「千と千尋の神隠し」の映画を一端としてとらえることができると考えています。そこから覗いてみると、現代の子どもたちも、まんざら捨てたものではないと見えてきます。前思春期に、その瞬間が訪れる時があるから、その機会を大事にすることに警鐘を鳴らしたのではないのでしょうか。



今のアフガニスタンやバングラデシュの子どもたちの眼は光っています。あの子どもたちの眼は、30年前の日本にはありました。けれども、遅れているという、貧しいという条件だけが、その光を保証しているというのでは困るのです。

豊穡で食事でも何でも溢れるほどある日本で、新しい一つのことを学ぶのに、あれだけの眼の輝きとエネルギーと意気を子どもたちはどうやって取り戻すのでしょうか？

これは先生方、親御さん方のテーマであり、私は可能だと考えています。それを是非21世紀の間に実現しようではありませんか。

現代は、一人一人が自分に目覚め、個性をもち、まったく違うエネルギーと方向性をもっています。これら一つ一つを大事にすることに気付いているのですから、このことは、単純に昔の日本を取り戻すということではありません。

けれど可能性は同じだと考えています。今日の話がそういうことを考える端緒にさせていただければと思います。

会場の質問から

Q： 子どもが2～5歳の頃、家庭がうまくいっておらず、虐待のような状態で育ててしまい、そのせいで未だにうまく人ととけ込むことが出来ず、引っ込み思案です。親として申し訳ない気持ちでいっぱいです。親としてこれからどうしてやればいいのかのでしょうか？

A： 親として申し訳ないという気持ちが出てきたら、それでいいと思います。その気持ちを大事にしてください。その気持ちを表現して、何かしようとしたら嘘になるのです。その必要はありません。その気持ちが起こってきたら、子どもは救われると私は思っています。

日本で最初に精神分析家となった古澤平作博士は、「許し」というものを心の中で生ずることができたとき、物事は解決するというを60年前に説いています。ただし、同じ状況に陥ったときに、今度は手を出さないことです。見守ってやってください。

Q： 「千と千尋の神隠し」に登場する一人っ子でわがままに育った「坊」についてどのように考えたらいいのか教えてください。

A： 現代の親は、規範的な面を教えることが少なく、それが子どもの自我の目覚めを阻害している。自分の子どもの微妙な変化に気付かない。親は家庭教育において、3歳までは子どもが「この世に在っていい」という根元的な容認、基本的信頼感、安心感をもつというのが「坊」が登場する最大のテーマです。3歳から6歳では「してはいけないことと、していいこと」という規範をきちっと伝えることが親の役目です。

Q： 現代の子どもたちの中に、「こころの窓」とも言える「興味」をもたない子が増えてきていますが？

A： その原因は一つではありません。現代の子どもは、溢れる物や愛情の中で自分の力で得たものがありません。与えられた「もの」をどのような形で自分で得たものにしていくかが大切です。親から与えられている「もの」を当たり前としている子どもに、自身で原点から考え直し、どうしても欲しい「もの」は自分で得るようにしていくことが大切です。その他、文化、情報、社会状況も関係があります。場所が違えば、世間の価値観に引き回されていることもあります。親が自分にとっては何が一番大事なのかを見つめてみると、子どもにとって何が一番なのかが見えてきます。